

一宮市
博物館
だより

No.38 2006.3



寛文水指

国指定史跡「小長輪陶器窯跡」を参考に、復元した穴窯で焼成された作品。窯内の条件によって多量に異なる効果が現れることがある。
「陶工・鈴木ノ出展」より

陶工・鈴木八郎展

四月二十九日(土・祝)～五月二十八日(日)

記念早茶会／四月二十九日・五月二十八日
午前十時三十分～午後三時(五百円・前売り四百円)



▲八郎

瀬戸市出身の鈴木八郎(一九五〇～二〇〇五)は、一九四七(昭和二十二年)「瀬戸陶器」で初入選して以来、日展を主な活躍の場としてきましたが、一九七四(昭和四十九年)年に「小長曾陶器室跡」を参考に穴窯を復元して鎌倉古陶の風格を再現することに成功。以来二三年毎に「穴窯作陶展」を開きその作品を発表し続けてきました。そして、二〇〇二(平成十五年)年には瀬戸市無形文化財「陶芸灰釉技法」保持者に認定されました。

から多くのことを学び、第二次世界大戦終戦直後、連吉が小原村に、江戸のはじめ本阿弥光悦が遠東の敷々峰につくった芸陶家村を再現しようと試みた際、津井清市・水野双鶴などと共に加わって、「無風庵」に住み修業します。当館では、昨年市民の方から多くの作品を受贈しましたが、それを機会に「宮市との縁を知る」ことが出来ました。連吉は大正から昭和にかけて前衛的な芸術活動を展開していましたが、そこには彼の芸術を理解し援助を惜しまなかつた原二溪など素封家たちの存在がありました。二宮の森伝吉もそのうちの一人でした。二編年合巻の目を飾る後文化財を前に、追記深く、戦後四十年の文化財保護の日を飾る。



▲不目皿



▲黒輪家史大皿



▲編部花器

八郎は、戦前連吉を介して二宮の森伝吉の知遇を得、また、伝吉を介して妙興觀想寺河野宗寛老師との深い交流もありました。本展では、陶芸作品をはじめ身近な自然を描いた素描画などを展示し、鈴木八郎の世界をご紹介します。(毛受英彦)



▲異調赤絵鉄秋文花器



▲編部陶器



▲異調赤絵金彩陶器

いちのみや

戦国武将列伝 (仮称)

六月十日(土)～七月九日(日)

I 黒田城をめぐる人々

かつて、黒田(二宮赤木曾根町黒田地区)は鎌倉街道の要衝として栄え、黒田城が築かれると、町は城下町の様相も呈しました。城の創築は明らかではありませんが、尾張の支配者の家系とともに、城主宮次々と変わりました。近世になると、城は廃されましたが、黒田政在の杜々には、現在も城主からの文書や奉納品が遺されています。杜々所蔵資料等から、山内氏・黒田氏・赤井氏・柳氏の支配を辿ります。

II 市域ゆかりの戦国群像

若き日に信長から拝領した足平景綱の「徳」を慕い、持ち続けられた兼松正吉(尾張国柴野郡島村・現市内島村)のゆかり。佐々成政と死闘を演じた前田利家の臣・村水福(同中島郡島村・現市内島町)のゆかり。秀吉の縁者浅野長政(同丹羽郡浅野村・現市内浅野のゆかり)など。信長、秀吉などに仕え、戦乱の世に煌々とした市域ゆかりの戦国群像にスポットを当て、遺された資料を展示します。



▲陣羽織(白絹着衣)
山内忠義所用
(財)土佐山内家
宝物資料館蔵



▲黒布威鳥帽子形兜
(財)土佐山内家
宝物資料館蔵

III 山内家ゆかりの資料

山内豊は、黒田城主山内盛豊の三男として天文十四(一五四五)年に生まれました。十五歳で父とその主家を失って浪浪の時代も過ごしましたが、信長家臣の羽柴秀吉に仕え、武功を重ねました。秀吉の死後は家康に近づき、最後は上佐一國の太守まで登りつめました。二豊が没すると弟康豊の子忠義が跡を継ぎ、山内家は幕末まで十六代を重ね、土佐を支配しました。

山内家累代の美術工芸品、古文書を収蔵する「財」土佐山内家宝物資料館のご協力のもと、伝来品の一端を展示します。

(岩井 卓)



▲山内家累代村古城址図 名古屋市蓮花文庫所蔵

▲仁王具足 山内盛豊所用
一宮市津留川資料館保管

Information

主催/一宮市博物館

観覧料/一般 300円(240円)

高・大生 100円(80円)

小・中生 50円(40円)

※()内は前売券、20人以上の団体料金

休館日/6月12日(月)、19日(月)、26日(月)、7月13日(月)

講演会/6月18日(日) 午後1時30分～

「山内一豊とその妻」

講師/(財)土佐山内家宝物資料館長

岩井 卓



▲長谷川其一画像 永福寺(福井市)所蔵

▲黒川高徳画像
宮内省(大山山)所蔵
写真提供:名古屋博物館▲浅野長政画像(模写)
東京大学史料編纂部蔵模写▲中川正吉画像
若菜神社八幡宮(一宮市)所蔵
出版寄託

箱ずしの話

平野と海の箱ずし



▲机箱

平野の魚食文化

濃尾平野で暮らしていると、ついどこにでもあるものかと思いがちになる五段重ねのすし箱(ツシバコ)。この箱の内側の大きさは、幅十七センチ、長さ一十六センチ、深さ五センチ程度で、押された側面は滑りやすいもの、どこでも見ても同じに見える。

そんなありふれたすし箱だが、今や存続の危機に瀕している。と言うとずいぶん大げさだが、平野の食文化の変化とともに、このままでは忘れられていくことは間違いないであろう。従来、二宮周辺に暮らす人々が食す魚といえば、川魚が主であった。秋の彼岸、田の水落としてのときにはハエツナの子やナマス、ウナギ、コイなどが獲れたものである。道具は四つ手刺(ツツア、ツツアミ)や釜(ツツ)、地獄刺(ツツクアミ)などである。魚が多ければまつかみや竹貫(こ)でも獲れた。魚を獲るのは「漁師さん」と思いがちなが、決してそうではない。そして、目といえはアサリやハマグリではなく、タニシだった。

もちろん、濃尾平野でも木曾川左岸の北方では、地曳網や刺網を使って川漁師が本格的な漁をしていた。しかし、いずれにしても、川に由来する魚食であったと言える。

平野の魚食のルーツ

濃尾平野にある代表的な発生時代遺跡に朝日遺跡(名古屋市・清須市など)広範囲にわたる。前期から後期にわたって環濠や溝に多くのハマグリやマガキが埋まされ、それら貝類に守られ多くの魚骨が検出されている。大型のマガキやウシワウ、魚種を特定しやすいマダイ・クロダイの影に隠れて注目されにくいのであるが、検出された魚骨の中には、多くの淡水魚が含まれていたのである(「愛知県歴史文化財センター研究報告第5号」)。ナマス、フナ、コイ、ウナギ、アユ、そして、ハマグリやマガキの貝殻に混じって、オオタニシ(マルタニシ)の輪郭な殻が発見できるのである。

つい最近まで平野部の農村で行なわれていた魚獲りのルーツは、水田で魚を育てるようになった外来人の生活の中にあると言える。



四つ手刺でハエツナを獲る
...丹阿彌三ツ井 松岡孝一さん

フナ味噌
...北方町大田 豊岡耕吉さん、富子さん
...2005.1.18

箱ずしの話

ナマズの薄焼き、タニシの味噌焼き、フナ味噌、コイ味噌など、二宮周辺の人々にとって馴染みの深い魚料理の中でも、祭りなどのハレの日にしか食べられない箱ずしは、特に思い入れのある「馳走」であった。

箱ずしは切りずしとも呼ばれ、「箱を六等分か八等分に切って食べた。まず、この箱が箱に付かないように軸紙にハラン(ヒトツバと呼ぶ)を敷く。その上に酢飯をのせ、この飯の上にのせる具(こ)は、ハエ、レンコン、カクラが代表的なものであった。ハエは、焼いた際に使われて差して下してあったものを、形をこわさないようにしたいものである。具(こ)の上にヒトツバをのせて、上蓋をする。五段重ねならツメ(ヤウ)をして(ホツ)、半日から一日おく。箱から出して、切り分けたらでき上がりである。

すしには、他にサバすしもあった。サバは「四のまま製を出して塩をし、飯をつめて箱に三本つけ、四本つけにした。



1-3 大和町野原町の藤田さんで作っていた箱ずし 1988.9.12
4 丹阿彌三ツ井の河口家一さんの自宅で、甘酒蒸らすときに作られた箱ずし 1989.10.22

所かわれば具もかわる

「くらしの道具(今と昔)」で紹介している海の道具の中に、濃尾平野と同じすし箱がある。上じのせる具は何かとお聞きすると、「エソのちから煮だす。」と語られた。

エソという魚を、二宮周辺の魚屋であまり見かけない。それどころか、小骨が多すぎて、食べにくいらしい。

作り方は、まずエソの腹と皮を取り、身だけにして箱で蒸す。細かい骨を取り除きながら、身をほぐす。そして、水気を切って土鍋で二十分ほどしゃもじで押さえるように煎る。味付けは砂糖と醤油。二度にたくさん作っておいて、この飯にかけたり、箱ずしにしたりする。ガスコンロが普及する前は、七厘を使った。ちから煮の「ちから」は、作るときに力が必要だとも、食べる時力が出るからだともいうそうである。いずれにしても、良く考えられた海の保存食と言える。



1-4 丹阿彌三ツ井の河口家一さんの自宅で、甘酒蒸らすときに作られた箱ずし 2005.12.11

所かわれば具もかわる。海には海の、平野には平野の暮らしがあるようである。
(久保節子)

平成十七年度(下半期)

博物館事業報告

平成十七年十月二日～十一月十七日

秋のくらしの道具

本展覧会は、歴史を学び始める小学校四年生を対象に企画し、今回で十五回目となる展示です。衣食住の資料を中心とした民俗資料を展示することを主眼としていますが、さらに、自然環境が異なる地域の資料と比較することにより、地域による生活道具や暮らしの違いについても紹介しました。

平日には市内四十二校の四年生が毎日のように来館し、博物館が作成提供している学習用解説カードを手にメモをとる姿が見られました。

週末には海・平野・山の暮らしを学ぶ講座を行い、展示では表現できない体験をはじめ、実体験から生まれるお話を聞く機会も設けました。

また、会期中に中学生の職場体験があり、見学の手どもたらにろうの刀作りを体験しました。

テーマ 海のくらしを体験!

日時 平成十七年十月二十一日

講師 清水光人氏・宮地明彦氏

内容 日置島のみなさん

んから、海辺の暮らしや漁業のお話を聞き、タコめし、シラスめし、ゴンドウ汁(雑魚が入った味噌汁)を味わ



▲「海のくらしを体験」講座の様子



▲ろうの刀作り体験

つてみました。

テーマ 平野のくらしを体験!

日時 平成十七年十月十六日(日)

内容 二宮の暮らしの体験

ンバヤキ(わかしのおやつ)を味わってみ

ました。また、石臼で粉を挽いたり、カラ

サオやアブチを使ったりと、道具を中心

とした道具を実際に使ってみました。

●テーマ 山のくらしを体験!

日時 平成十七年十一月十三日(日)

講師 深淵修司氏・田中真子氏・田代和代氏

内容 本根村、木曾町里川に訪ねるみなさん

から、山の暮らしの今昔、植

物・動物と人との

のかわりなど

のお話を聞き

ました。また、

ゴブイモチやヘー

モチ、ホウバナシなど、二宮にはない味を体

験しました。



▲お芋の加工体験の様子

平成十七年十一月一日 市民文化財めぐり

市民の方々に、私たちの貴重な先人の遺産である文化財に親しんでもらい、文化財愛護の精神を高めていただくため、昭和四十二年以来毎年「市民文化財めぐり」を開催していますが、今年はその四十二回目です。四月二日

に「二市町が合併したのを

機会に、旧宮内西・木曾

川地区それぞれから選ん

で見学コースを設定しました。真清田神社宝物館、石月神社、玉宮記念本

曾川図書館、賀茂神社、



▲宮内一室屋での解説

尾西歴史民俗資料館、船渡船場跡、富田里塚、妙興寺、博物館、快晴、参加者三十二人。

平成十七年十一月六日 秋の博物館・美術館めぐり

四月日の合併により、宮内市には博物館・美術館をはじめ、歴史民俗資料館、木曾川資料館、玉宮記念木曾川図書館など、さまざまな分野の文化施設が増えました。

そこで、それぞれの施設を身近なものとし、今後

も利用していただくことをその趣旨として、各館

をめぐりました。参加者四十四人。

●見学先

玉宮記念木曾川図書館展示室

木曾川資料館

三原館子にゆかりのある食堂で昼食

三原館子記念美術館

尾西歴史民俗資料館

みくら郷土館

二宮市博物館



▲みくら郷土館にて
〔「美濃国書展覧会」〕

平成十七年十二月三日～十八日 二〇〇五二宮市現代作家美術展覧会

博物館では、昨年に引き続き、二〇〇五二宮市現代作家美術展覧会を開催いたしました。第六十三回「宮内美術展」の依頼出品者の選りすぐり作品や市長賞受賞者の作品、及び宮内美術家協会(日本画、洋画、彫刻、立体、工芸、デザイン部門)、宮内芸術家協会(宮内芸術家協会)

各協会推薦者の作品七十六

六点を展示したものです。

会場では、やわらかな光と

紅葉を取り入れた落ち着いた雰囲気の中で多くの来館者の方々に鑑賞して



▲展示会の様子

いた方をしました。

今年もまた、旧尾西市田木曾川町の作家の方々の力作も加わり、市民による美術振興がより一層進んできたと実感しております。

平成十八年二月五日～二十九日 「発掘された日本列島」

二〇〇五(新発見の考古学展覧会)

「現代によみがえる遺跡」

「発掘された日本列島」

「二〇〇五新発見の考古学展覧会」

では、旧石器時代から江戸時代まで二十四の遺跡を取り

上げられ、二〇〇四年度に注

目を集めた遺跡の発掘調査

で出土した遺物により、日本

列島に暮らしの人々の足跡を振り返るもので、日

本各地の遺跡から発掘された第一級の資料が展示

されるとともに、最新の考古学の研究成果が紹介

されました。

テーマ展示「現代によみがえる遺跡」では、北海道

から沖縄まで、十ヶ所の遺跡が取りあげられ、その

内容や復元模型の様子、出

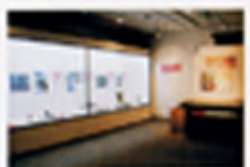
上遺物の紹介が行われま



▲展示会の様子



▲子どものための展示説明会



▲展示風景

開演事業として、講演会を二月二十二日(日)に妙興寺公民館で開催し、文化庁文化財部記念物課の文化財調査官、玉田芳英さんに、「列島版一〇〇五—みどころ—あれこれ—よもやま話—」のテーマでお話いただきました。キトウ古墳の発掘調査に実際に携わってみえる講師の臨場感あふれる話に聴講者の皆さんは、深い感銘を受けた様子でした。

平成十八年二月五日ほか
【特別企画】尾張平野を語る①

戦国時代の尾張

博物館講座「尾張平野を語る」ではこれまで、歴史のみならず自然環境や民俗文化など幅広い分野から講師を招いて講演会を行い、尾張平野―特に尾張平野について考えました。

今回は、戦国時代の尾張に焦点を当て、動乱の時代に生きた武將をはじめ、その時代に生きた庶民の姿や村、生産や物流にも注目し、全体像を捉えました。

●テーマ「戦国時代の尾張」

日時 平成十八年二月五日(日)

講師 神奈川大学教授 三宅浩郎氏

参加者 百六十九人

●テーマ「陶磁器の生産と流通」

日時 平成十八年二月十九日(日)

講師 愛知学院大学教授 藤澤昌祐氏

参加者 七十五人

●テーマ「道と信奥」

日時 平成十八年二月十九日(日)

講師 岐阜市歴史博物館学芸員 土山公仁氏

参加者 百二十五人

●テーマ「戦国時代の城と村」

日時 平成十八年二月二十六日(日)

講師 奈良大学助教授 千田尚博氏

参加者 百十二人



▲三宅浩郎氏講演



▲藤澤昌祐氏講演

平成十八年三月四日ほか
【特別企画】はにわをつくる

小学校高学年児童と多くの親を対象にして三月四日、五十九日に開催しました。

今回の参加者は、上郷の親子のみならず、四月五日の一日園ではにわを制作、博物館で二日間ほど乾燥させたあと、隣接する妙興寺境内で野焼きで焼き上げました。野焼きの日は、風が強い日でしたが、みんなで協力してはにわを焼成することができました。若火した直後に温度が急激に上がりすぎたためか、かなりのはにわが割れてしまいましたが、



▲はにわをつくる



▲野焼き準備作業

文化財解説ボランティア養成講座
修了生の活動

博物館に隣接し愛知県指定史跡でもある妙興寺境内地を案内する活動を、特別展開催期間中の土・日曜日に行う実施しました。文化財解説ボランティア講座修了生のうち有志による解説として、午前中は十時から十二時から、午後は二時三十分～

時三十分から各二十分間ずつ、希望者に対して解説活動を行ってまいりました。

四月以降は、特別展「企画展開演時の土・日曜日」に制度的に実施して行くことを修了生の間で検討しています。

妙興寺境内地の
散策ボランティアガイドを体験して

柴田利男

妙興寺について、私は子どもの頃から、「尾張に過ぎた妙興寺」の妙興寺と、略の長い大寺とを混同されていましたが、学校の帰りによく遊ばせてもらっただけに、こんなに山積があり、境内そのものもこれほど貴重な文化財的意義があるとは認識していませんでした。これはこの文化財なら、もっと我が街の誇りとして市民の皆さんがたに知ってもらうべきであり、知らしめるべきと感じていました。博物館に求められた皆さんたちにもっと魅力付けができるはずと思い、境内散策のボランティアガイドをやってみたくて申し出てまいりました。

とは言うものの、随分心配もしました。意欲はあっても知らないことや専門的なことを聞かれたらどうしようかと……。

でも大丈夫でした。案ずるよりは産むが易し、の古言のとおり、私にもできました。ほんとうにうれいことでした。特別展「愛知された日本列島」の展示期間中に、九組七十一人もの方たちに説明を聞いていただき感激しています。そして感激とともに意外に感じたのは、

市内在住の方々も妙興寺の存在をあまりにも存じないことでした。車の駅で妙興寺は知っていますが、来たことがないとか、寺の境内には入る人ですが、言葉が多いのに、聞くとともに、勇気が湧いて



▲妙興寺二門前で説明

きました。自分がいまだ少し知識を深め、説明ができたら、我が街の誇りをもっと知ってもらうことができ、市内はもとより遠来の皆さん方にも話題の種としてお土産が提供できると……。そして、案内した中のお二人が、「宮内には意義深い博物館に隣接して、これほどの寺院があり羨ましいの言葉は心に残りました。」

境内を案内し終え境内地西入り口の側でお話を聞いてお帰りくださいと別れの挨拶をしますが、皆さんがたのお顔の表情は、私に元気を与えてくださいます。ほんの短い出会いの時間しかありませんが、今後も私なりに精進努力をして、皆さんの方々に少しでも多く、わが街の良さ思い出を持ち帰って頂けるよう努めていきたいと思っております。

平成十八年三月五日・十九日
【特別企画】手つむぎ・染め・織り展

織物講座生と伝承会員による、第十七回作品発表会。今年度には製作した、反物テーブルセンターなる約五十点の作品を展示しました。この観覧の方には、機織りや染つくりの体験をしていただきました。(写真は大正)

平成十八年三月二十六日
民俗芸能公演

博物館では、市域に伝わり、現在でも活動を続け継承されている無形「民俗」文化財の公演を行っています。

演目

鳥文楽Ⅲ「赤坂霊験記」

宮後住吉踊り

投物「船道成守」(手踊)



▲鳥文楽

平成十七年度(下半期)

文化財保護事業

昨年の合併で市域の文化財件数は大きく増え、旧三宮市域にはなかった種類の文化財も保護の対象となりました。多様な満ちた多くの文化財を将来へついでいけるのが、課題は山積しています。

（岩井 卓哉）

新しく登録された文化財(国登録)

真清田神社本殿及び渡殿

木曾川資料館主屋

木曾川資料館収蔵室

古来、二宮は真清田

神社を中核に形成され、門前町として栄えた。同社の本殿は五世の再建とされるが、先の大戦で空襲を受け、船どの建物とともに焼失した。今回登録された建物は、復興事業のなかで昭和二十九年に建立された。施工は当地方で活躍した棟梁大竹利左衛門。木造平屋建、銅板葺き。真清田二丁目。



▲真清田神社本殿の内部



▲資料館収蔵室

本曾川資料館主屋は、大正十二年竣工の旧木曾川町会議事堂で、近年取り壊された役場庁舎とともに建てられた。木造二階建て、瓦葺きで、天井の高い

旧議場には物産館等が建ち、

同館収蔵室は、旧西馬食庫で庁舎等と同様の建築とあろう。外観は上級意匠の威のようだが、躯体は当時の地方都市では珍しい鉄筋コンクリート造で、小屋組にはトラスが用いられる。木曾川町里田字下光寺南。

新しく指定された文化財(市指定)

蘇原緑地のサイカチ

長賢寺のヤマナキ

サイカチはヤマ

料の樹木で、ササニシキ等を含む豆科の植物で、川岸や水辺に自生する樹であるが、蘇原の白牛箇所はわずかなのである。蘇原緑地のサイカチは、数少ない古木である。蘇原町蘇原字南友重・河原崎。ヤマナキは、栽培の方きのように改良されていないもので、蘇原では山間部に自生が見られるが平地にあるのは珍しい。長賢寺のものは樹齢二百年と推定され、平地にある古木という点で貴重である。浅井町東浅井字戊寅。



▲サイカチ



▲ヤマナキ

保存修理が行われた文化財(市指定)

紙本著色神農画像

江戸初期の作品で、著しい折損やそれによる褪色・虫食等が見られた。本紙の修理(剥落止め)

欠失部の補紙・折損の手当等を行うとともに、表具・保存箱を新調した。妙興寺所蔵。



▲修理後

修理予定の文化財(市指定・十八年度)

妙興寺開山堂・神堂(十八・十九年度)



▲開山堂

妙興寺は明治二十三年の大火で多くの建造物を焼失したが、神堂は大正七年、開山堂は同十四年に再建された。両棟とも経年による損傷が見られるため、屋根の葺き替え・床の改修などを行う。また震災対策として小屋裏に断壁を新設する。竣工後、報告書を作成する。

木造阿彌如来像(十八年度)



開山堂は、神仏習合から生まれた尊像で、大日如来の化身とされる。本像は頸部の損を首た

像子彫で、頸項には五輪塔を戴く。輪材の二本道で彩色に仕上げられるが、現在は持物や手先が脱落し、彩色も剥離。剥離が甚だしい。修理では、浮き上がった輪材に剥離止めを施し、脱落した部材は元の位置に接合する。開明神社所蔵。

木造阿彌如来立像(十八年度)



長賢寺の本尊で、修成末期の作とされる。輪材の二本道で、表面は漆箔と金泥で仕上げられるが、どちらも脱落している。

現在、面影などの表面が浮き上がり、剥離もひどい。袖先等には鼠害を受け、後補の尊なども形状がおかしい。修理では、表面の見苦しい後補部分を除去し、状況に応じて下地を補修する。また欠損部への充填・補作、後補部への整形等を適宜行う。

※参考引用 各調査書・修理設計書

平成十八年二月二十五日 文化財防火訓練

昭和二十四年二月二十六日に法隆寺金堂が焼失しました。以来、その日を「文化財防火デー」と定め、防災意識高揚のため各種の行事を開催しています。今年には五十二回目になります。本教育委員会は消防本部とともに、二月十八日に防火ハット等、二十五日に防火訓練・文化財管理者研修会を実施しました。防火訓練は天和町の妙興寺境内において雲水市消防署員・地元消防団員らの皆さんが中心となって行われ、地元町内会・保育園児童など多くの参加がありました。



平成18年度催し物のご案内

展示 8月12日(土)～23日(水)

一宮市子ども写生大会作品展

企画展 9月2日(土)～18日(祝・月)

2006 一宮美術作家新展

企画展 9月22日(金)～10月1日(日)

一宮写真協会展

企画展 10月7日(土)～11月5日(日)

衣装から見た世界の文化

企画展 11月11日(土)～26日(日)

岩田哲夫 水墨抽象の世界

— 東西絵画の融和をめざし —

企画展 12月2日(土)～12月17日(日)

2006 一宮市現代作家美術秀選展

第64回一宮市美術展の依頼出品者、市長賞受賞者、一宮美術作家協会(日本画、洋画、彫刻・立体、工芸、デザイン部門)、一宮書道協会、一宮写真協会の各協会推薦者の選りすぐり作品を展示します。



企画展 平成19年1月6日(土)～2月26日(日)

くらしの道具 ～今と昔～

作品展 平成19年3月4日(日)～3月18日(日)

手つむぎ・染め・織り展

織造講座(下記参照)の受講生と卒業生(弘孝会員)による、18種類の作品発表会。手つむぎ・染め・織りなど多くの工程を経て製作された本物の作品を展示します。



公演 平成19年3月21日(祝・水)

民俗芸能公演

講座のご案内

織造講座 4月～2月 3月に作品展

一宮地方は、江戸後期から明治前期にかけて、織造業や染色業など織造の生産で有名でした。本講座は、この織造の歴史をたどるとともに、その当時の技術の保存及び弘孝会員として、毎年20回の講座。年度末の「手つむぎ・染め・織り展」では、1年の成果を作品として発表します。

古文書講座 5月～2月

本講座は、当館で保管している主に市内の近世古文書をテキストとして使用し、古文書の読解力を養うと共に、江戸時代の民衆の生活の様子を探り、地域社会のあり方を明らかにする目的で開催しています。平成4年度からはじまり、来年度が53回となります。5月から2月までほぼ毎月1回、合計10回の講座を開き、受講は3年で修了としています。4月1日の赤松報紙上で新受講生を募集します。

博物館講座 5月～10月

文化財解説ボランティア養成講座

博物館講座 2月

尾張平野を語る11

木曾川資料館リニューアル・オープン!

改築工事のため、臨時休館していた一宮市木曾川資料館が、1月6日にリニューアル・オープンしました。

歴史の建造物である日本書院町会議事堂(国登録文化財)の講堂を展示空間としています。展示・建物ともご覧ください。

■展示の内容

1. 江戸一宮の生涯(重要無形文化財認定される戦国武将江戸一宮の生涯を紹介)
2. 一宮ゆかりの戦国武将(信長、秀吉等に仕えた市域ゆかりの戦国武将等・浅野長政・奥村永福・兼松正吉・梶川高盛・長谷川秀一・吉月意足などを紹介)
3. 史跡散策(市内の中興城跡や阿蘇などを紹介)
4. 展示替えコーナー(民具などの収蔵資料を中心に展示)

■利用のご案内

観覧料: 無料

休館日: 毎週月曜日、休日の翌日、年末年始

開館時間: 午前9時30分～午後5時(入館14時30分まで)

場 所: 一宮市木曾川町黒田字宝光寺東18-1
(木曾川商工会館の西隣)

交通アクセス: 名鉄本線「新本館駅」下車・徒歩を渡り北へ徒歩5分
◎駐車場はありませんので、公共交通機関のご利用をお願いします。



▲開館式でのテープカット



▲展示風景

利用案内

名鉄名古屋本線「御供町」駅下車南口より徒歩7分

〒491-0922 愛知県一宮市大和町野崎52990

TEL 0566-46-3215 FAX 0566-46-3216

【観覧料】(常設展・特別展を含む)別途決定する。

— 観— 大人=200円(160円) 高・大生=100円(80円)

小・中学生=50円(40円) * ()は20人以上の団体料金

【休館日】毎週月曜日、休日の翌日、年末年始(12月28日～1月4日)

【開館時間】午前9時30分～午後5時(入館14時30分まで)

●一宮市内の小・中学生及び身体障害者等の手帳を提示の方

(1人1人1人を含む)は無料。(ただし、特別展期間中は除く)

●一宮市発行の「シルバー優待証明書」持参の方は無料。

【HP】<http://www.icm-jp.com/>



第38号

発行日 平成18年3月31日
編集・発行 一宮市博物館
制作 サンメッセ株式会社

